

鹿児島市におけるパブリックアートの全体認知度と単体認知度の比較 ～景観演出による街づくりの効果と評価に関する研究その2～

正会員○田之頭七絵³⁾
同 鮎川 武史³⁾
同 友清 貴和¹⁾
同 山下 剛²⁾

1. はじめに

ここでは、「景観演出による街づくりの効果と評価に関する研究その1」で述べた認知度調査ⅠとⅡの分析結果の比較を行った。認知度調査Ⅱで扱った12のパブリックアートについて、【全体認知度】と【単体認知度】の差を比較する。背景を含めたパブリックアートの実物写真そのものの評価と背景はそのまま画像上でパブリックアートだけを入れ替えたり、実物と全く異なるパブリックアートを張り付けたりして作った景観の写真の評価してもらった

2. 全体認知度と単体認知度の比較

認知度調査Ⅰでの【全体認知度】よりも【単体認知度】の方がアップしたパブリックアートは、「西郷隆盛像」・「朝の調」・「こだま」・「カテット」・「ししおどし」・「天空をめぐる星」であった。逆に、【全体認知度】よりも認知度調査Ⅱの【単体認知度】の方がダウンしたパブリックアートは、「戦災復興20周年記念塔」・「若き薩摩の群像」・「母と子の群像」・「悠雄」・「ま四角三つ」・「星空と彫刻と滝のワッス」であった。

2-1 【全体認知度】よりも【単体認知度】の方がアップしたパブリックアート

「西郷隆盛像」は、このパブリックアートの存在を知っていると答える人の割合が増え、【全体認知度】よりも【単体認知度】の方がアップしていることから、地図上における設置場所よりは、設置されている周辺環境のほうがより印象的に認知されている。また場所を知らないと答えた人の割合に対し、背景を知らなかった人の割合がかなり少なくなっていることから、存在を知っている人には設置景観の方がより印象的に記憶されていることが伺える。すなわち、「西郷隆盛像」は鹿児島にあれば地図上の場所がどこであるかよりも、緑の景観の中にあることを印象的に記憶している人が多いと言えよう。

市民文化ホールに隣接する公園に緑を背景に設置されており人物をモチーフにした彫刻作品である「朝の調」も同じような傾向を示している。これは、このパブリックアートが大きく金色であるという視覚的に非常に目立つデザインであるところによると思われる。

平田橋の上に設置されている「こだま」は、誤認も含めて知っていると答える人の割合はあまり変わらないの

に、【単体認知度】が【全体認知度】の2倍近い認知度を示している。また、場所がわからない人に比べて背景がわからない人は非常に少なかった。この作品は、川を背景に橋の真ん中という他の作品とは違う印象的な設置環境である。そのため、場所の認識よりは、川を含めた景観が印象的に住民に記憶されていることがわかる。

川沿いにある「カテット」は、背景を誤認している人が若干いるが、知っていると答える人は全体として増えている。場所よりも背景の方で認識する傾向にあることがわかる。

これらに比べ特異な値を示すのが、天文館アーケード内の「ししおどし」である。この「ししおどし」は、【全体認知度】において正確な認知度は5%強だったのが、【単体認知度】は30%弱とかなり大きくなった。また場所を間違えた誤認率が30%弱だったのが、背景を間違えた誤認率では20%強、パブリックアートそのものは見たことがあるが20%強であったのに対し、パブリックアートだけ知っているもの5%強であった。【単体認知度】調査の結果から、どのような背景の所に設置されているかを、被験者がよく理解していることが分かる。しかし【全体認知度】の誤認率が高いということは、おおよそ天文館にあることは分かっているが、似たようなパブリックアートがいくつかあるため、被験者が地図上で特定の場所を同定することは困難であったことや通過途中に目にするものはいかに曖昧に記憶されているのかを示している。

これと似た傾向を示すのが、天文館の電車通りにある「天空をめぐる星」であるが、【単体認知度】の正解率が高いのは、「ししおどし」に比べて、待ちの場や目印に使用される頻度が高いからであろう。また認知度はアップしているにもかかわらず知っているという人が減っているということから、漠然と場所を知っている人は多いが、実際の景観を知っている人はそれより少ないことがわかる。

2-2. 【全体認知度】よりも【単体認知度】の方がダウンしたパブリックアート

「戦災復興20周年記念塔」は、知っていると答える人が減少したのに伴い、認知度も減少している。さらに、間違えて認知している人が増えたことから場所の認知も低

The Comparison between the recognition degree of the established place and the established scene

~The Study of the effect and the appraisal of town-design by the production of the scene, part 2~

Tanokasira Nanae, Ayukawa Takeshi, Tomokiyo Takakazu, Yamashita Gow

かったが、景観としての認知はもっとしにくいことがわかった。

「若き薩摩の群像」は、認知度そのものは非常に高いが、【全体認知度】よりも【単体認知度】の方が割増していることから、やはり西鹿児島駅前という場所の印象がどうしても強いようだ。またパブリックアート単体は知っているも位置を知らないと答えた人はほとんどいないのに、背景を知らないと答えた人がいることから、待ちの場としてもよく利用されている「若き薩摩の群像」は、あくまでも西鹿児島駅前広場という場所にあるのが、住民の認識であろう。

電車通りでかつ高見橋にある「母と子の群像」では、【全体認知度】に比べ【単体認知度】における正確な認知度が割増している。しかし背景を答えられなかった誤認の割合を加味すれば、【全体認知度】と【単体認知度】の割合はほぼ等しくなる。このことは、パブリックアートの場所は知っているが背景は良く記憶していないことを示している。

「悠雄」は、積極的な夜間のライトアップなどを行っているが、場所の認知度よりも背景の認知度は低いことがわかった。この理由は、市役所前という設置場所のために【全体認知度】が高いことと、パブリックアートが大きいため背景と一体となった景観としては認知されにくいためであろう。

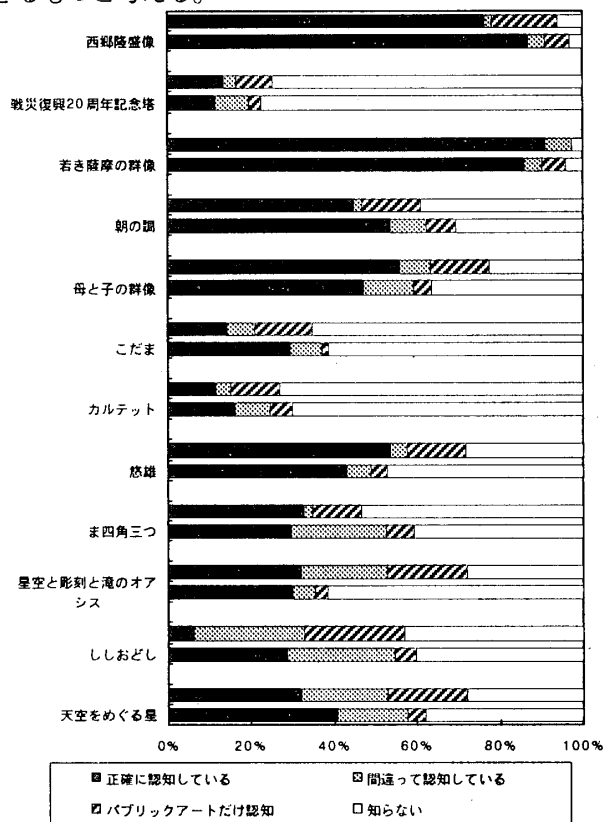
「ま四角三つ」は、知っているという人は全体として増えているが、正確な認知度は減少しており、また背景を間違えて認知している人の多さが目立っている。これは、パブリックアート単体ではよく知られているが、「悠雄」と同様大きい作品であるためにパブリックアート単体のインパクトはかなり強く、街具として利用されるために一体の景観としてとらえられにくい性質のものであると考えられる。

「星空と彫刻と滝のオアシス」は、その存在を知っていると答える人が【全体認知度】に比べて【単体認知度】では半分近く減少している。ここでは、正確な認知度の減少というよりむしろ認知が曖昧な人（設置場所を誤認している人+パブリックアートをみたことがある人）が極端に減少している。このことから「星空と彫刻と滝のオアシス」は、設置場所の背景も一体となった景観から設置場所をイメージはできても、単体ではその存在すらわからないほど周囲の環境や雰囲気为一体となって認知されていると考えられる。

3. まとめ

【全体認知度】では、住民がパブリックアートを見る時視野に

入る「パブリックアートとその周辺の背景」を認知して、その設置場所まで答えることができた人の割合が正確な認知度であり、地図上の場所を間違えた人は誤認に分類される。これに対して、【単体認知度】では、パブリックアート単体を見て、パブリックアートが切り取られた背景を正しく選択した人の割合が正確な認知度であり、パブリックアート単体を知っていると答えても、本来の背景を正しく選択できなかった場合、誤認の範疇に入ることになる。この両者の回答率を単純比較することは多少無理があるが、逆に言えば、前者の分析は街のどのような地域にパブリックアートを設置した方が良いのか、後者の分析は街のどのような景観の中に設置したら良いのかを判定する資料になり、景観演出による街づくりの効果と評価を同時に把握することができる指標となりうる。パブリックアートは、住民に認知されて初めて住民の評価を受けたりや行政投資効果を発揮できるはずである。今回の分析の結果から、パブリックアートの設置される場所によって、住民の認知の仕方や利用の仕方が違うことが明らかになった。このことから、この研究の結果は今後どのような目的でパブリックアートを設置し、住民にパブリックアートとどのように接してもらおうかを考える際に活用できるものとする。



【図-1】全体認知度と単体認知度の比較

本研究は平成8年度科学研究費基盤研究C(2)の助成によるものである。

- | | |
|---------------|--|
| 1) 鹿児島大学教授・工博 | Prof., Dept. of Architecture Faculty of Engineering Univ. of Kagoshima, Dr. Eng. |
| 2) 鹿児島大学助手 | Research Assoc., Dept. of Architecture Faculty of Engineering Univ. of Kagoshima |
| 3) 鹿児島大学院生 | Graduate School, Dept. of Architecture Faculty of Engineering Univ. of Kagoshima |